平成 27 年度大学院派遣研修報告書

派遣者番号	26Ｊ02	氏　名	福田　恭久
研究主題 ―副主題―	内容と言語の統合的学習が生徒の動機付けに与える影響 ―自己決定理論における仮説の検証―		
所属校	都立西高等学校	派遣先	早稲田大学大学院

項　目	内　容
Ⅰ　研究の目的	「コミュニケーション英語Ⅰ（Ⅱ）」の授業において、生徒に豊かなインプットを与え、その内容に関してディスカッションやプレゼンテーションなど言語使用の機会を教室で作り出し、生徒の既存知識や興味・関心、認知プロセスに訴えることで、生徒の内発的動機付けを高めることができるかどうかを検証する。そのために、最初に都立Ａ高等学校での実践により得られたデータから言語指導・内容指導と生徒の動機付けに関する質的分析を行う。さらに、その分析結果を踏まえ、都立高等学校の EFL（外国語としての英語）環境において実践可能な内容・言語統合型指導のシラバス、指導法、教材を検討する。２年次は所属校において学校の特色や生徒の実態に適した形でそれらを授業実践の中に取り入れ、質的・量的分析を行うことで、内容・言語統合型のアプローチが自己決定理論（自律性・有能性・関係性）の観点から学習者の内発的動機付けを高めることができたかどうかを検証する。
Ⅱ　研究の方法	・内容・言語統合型学習（CLIL） CLIL に関する先行研究や授業実践例を研究することで、CLIL の原理と都立高校で実施可能な形態・指導法を検討する。 ・動機付け Deci&Ryan の自己決定理論（SDT）や Dornyei の動機付け理論など動機付けに関する先行研究を深く研究することで、実際の授業で導入可能な動機付けを高める方略やデータリサーチの手法を探る。 ・第２言語習得（SLA）と言語教育 ゼミを通じ、インプット・アウトプット等に関する言語習得のプロセスやタスクのデザイン等に関する知識を獲得することで、CLIL 型のシラバス、指導法の考案に役立てる。 ・リサーチメソッド 大学院での研究指導等により質的・量的分析方法やレプリケーションの在り方等について幅広く学び、修士論文のリサーチデザインの作成に役立てる。昨年の研究の結果を踏まえてリサーチデザインを作成する。

Ⅲ　研究の結果	３か月間のCLIL導入により生徒の内発的動機付けを高めることはできなかった。SDTの基本的心理欲求である自律性と有能性を満たすことができなかったことが原因であると思われる。４月の調査から７月の調査にかけて内発的動機付けと自律性の値を上昇させることはできなかった。SDTでは自律性が統合的調整に重要であり、今回のCLIL型の指導で、生徒が十分に自律的でなかったということになる。有能性も自律性同様、内発的動機付けにつながるとされており、CLIL導入後の６月の調査でその値を上昇させることはできなかった。CLIL 型の指導により、有能感を満たすことのできなかった生徒が多かったと言える。質的分析の結果、その原因は次のとおりである。 １　時間的な制約に伴う生徒の負担 生徒はインプット・アウトプットの多さに負担を感じている。文法や内容を十分に理解した上で認知的負荷の高い活動を行うことが極めて難しい。 ２　評価 CLIL 型の指導で実践したことが定期考査に反映されていないので、中間考査以降、生徒の意欲の向上は見られなかった。今回の指導は学年全体の共通理解に基づく実践でないため、評価によるフィードバックを行えないことが生徒の動機付けに大きく影響した。 ３　認知的要求と言語的要求 CLIL は、内容に関する認知レベルと言語レベルの比は２対１が好ましいとされているが、内容に関する認知レベルに生徒の英語力が追いついておらず、内容について英語で論じ合うという深い思考言語活動が生徒のイメージどおりに行えていない。 ４　生徒間の意欲の差 ペアワークやグループ活動を行う際、生徒間の意欲の差が大きな妨げとなり、意欲的な生徒のやる気がそがれる結果となった。
Ⅳ　考察	質的研究では真正性の高い教材やタスク、インタラクション、自己分析活動の導入による動機付けの高まりが確認できた。しかし、量的研究の調査結果を裏付ける形で多くの生徒が語彙不足など言語的側面に限界を感じており、達成感を得られないでいることが分かった。CLIL により生徒の動機付けを育成するためには、言語活動を通じて生徒の成功体験を保証することが何にもまして重要である。そのためには担当教員相互の連携と共通理解に基づくシラバス、タスク、評価(assessment)の導入や動機付けを高める方略の導入・工夫が必要不可欠である。